

---

# 彼女は、剣を手にする

R A N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

彼女は、剣を手にする

### 【Nコード】

N5783V

### 【作者名】

RAN

### 【あらすじ】

世界のバランスを保つ剣を守護する役目の一族の少女。奪われた対となる片割れの剣を探すべく、彼女は旅立った。その旅の途中に出会った青年はとともに、世界の核心に近づいていく。

Red Bladeのother sideです。

dノベ転載。

「本当に、後悔しないんだね」

少年の問いに、少女はただうなずいた。

「そう、じゃあ、もう何も言わないよ」

少年は少女の傍らで、静かに目を閉じた。

少女は、一段階段を上がり、目の前に突き刺さっている細身の剣を引き抜いた。

すると、辺り一面眩い光が包んだ。

「リディア、そろそろ起きて、リディア」

声に導かれて、ゆるゆると目を開ける。

目を突き刺すほどの光。

しかし、その光は心地良い温度を持っていた。

だんだんと視界が保たれてきて、見えてきたのは少年の顔。

額から大きく真っ直ぐ伸びた角が生えている。

「……ラジー……」

「目が覚めた？ とりあえず、もうそろそろ動きたいから起きてね？ できるだけ明るいうちに動いておきたいから。あまりゆっくりできる旅でもないからね？」

ラジーと呼ばれた少年は、リディアが目覚めたのを確認すると、目の前に食器を置いて、さっそく朝食を勧めてきた。

彼はリディアの家系に代々仕える使役精霊である。

両親が亡くなり、一人で生きていくことになったリディアを支えたのも彼だ。

そうして、今、彼女の旅の助けをしている。

彼女の旅の目的とは。

リディアはふと、自分の右手側を探る。  
慣れた冷たい感触があつて、ほっと息をつく。  
柄を握り、自分の目の前にそのつかんだものを出した。  
朝の光に反射して、美しく輝く剣であつた。  
この剣こそが、彼女が旅立つことになつた理由であつた。

リディアの家系は、この剣を守る一族だつた。  
この剣は、神話の時代より世界のバランスを保つとされているものだつた。

世界の罪を背負う赤の剣と、世界を浄化する銀の剣。  
その剣が世界のバランスを保つていふ言い伝えだつた。  
彼女の一族はそれを代々守つていくことを宗教の最高機関から任命されていた。

しかし、ある日赤の剣がこつ然と姿を消した。  
何者かに奪われたのか、それすらもわからない。  
ただでさえ、剣は難所とされる高山にある。  
またさらにその周りには結界もほどこされている。  
簡単に人が近寄れない。  
しかし、一日一回は剣の様子を見に行くことを日課としていた彼らは、赤の剣がなくなつたことを発見する。

それからリディア達一家は剣を探して様々な場所へと行つた。  
住居を移しながら行つたり、家族が単独で赴いたり。  
しかし、赤の剣の行方の手がかりすら見つけることはできなかつた。

そうして数年、ついに父がその責任のために処刑されることになつてしまつた。

世界のバランスを保つ生贄でもあつた。  
剣がなくなつた剣の安置所は不安定になつていた。

そこに依り代をつけることによって、一時的に場所を安定させる。そのための依り代を作るためでもあった。そして次に、母が病気で倒れた。様々な疲労がたまっていたこともあっただろう。看病むなしく、母は息を引き取ってしまった。そうして、リディアは一人になった。

しかし、一族の剣を守る使命がなくなったわけではない。自分たちの一族がある限り、剣を探し続けなければいけない。世界のバランスを保つために。母の遺体も、次の依り代のために保管されている。そしてその効力も切れたら、次は私が依り代となるのだ。依り代となることに恐怖は感じなかったが、そうなってしまっただけは、恐らく世界のバランスは崩れていく一方だ。

それだけは避けたかった。父と母が守ってきたこの世界。なくしてたまるものかと、リディアは決意した。そうして、決意したのは、銀の剣を使って赤の剣を探すことだった。

赤と銀の剣は対になっている。

お互いの力により世界のバランスを保っていた。

もしかしたら、お互いを引きあう力はないだろうか、とリディアは考えた。

もちろん許可は取っていない。安置所から動かすことは禁止されていた。

だから知られてしまったら厳しい処罰を受けるだろうが、背に腹は変えられなかった。

「リディア、剣を見ているのもいいけど、ご飯食べてね」  
ぼーっとしていたようだ。リディアは呼ばれて、慌てて横に剣を

置き、食事に手を伸ばそうとした。

しかし、その手を止めて、リディアは周りを見た。

ラジーも気配に気づいたようで、目を鋭くして身構えた。

「隠れてないで出てきてください。隠れたままですと、敵とみなして攻撃しますよ」

リディアが脇に置いていた剣に手をのばして掴み、低い声でそう言った。

すると、すぐ側の木の上から葉ずれの音がしたかと思うと、影が降ってきた。

リディアとラジーは驚いて、その場から離れた。

木の上から降りてきたのは、黒髪に黒い瞳、そして全身黒い衣服に身を包んだ青年であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5783v/>

---

彼女は、剣を手にする

2011年9月3日06時41分発行